由緒

西暦二九八年に御即位された景行天皇の時代に上毛野国造が土師部の遠祖である天穂日命を磯部の岡に奉斎した磯部明神が当宮の起源です。

その後幾多の星霜を経て、文治三年（一一八七年）から当地を支配した桐生家が代々の守護神として崇敬し、観応年間（一三五〇年頃）には京都北野天満宮の御分霊を合祀して（梅原天神から）『桐生天満宮』と改称し、桐生領五十四ヶ村の総鎮守と定められました。天正九年（一五八一年）に徳川家康公が東征の折りには徳川家累代祈願所として朱印領を賜わりました。天正十九年（一五九一年）より徳川家の支配下となり、当宮の鳥居前には新たに『桐生新町』が形成され、鳥居から南へ向かって日本で最初の丁割りに基づく桐生の街並みが整えられました。

慶長五年（一六〇〇年）の関ヶ原合戦の折には軍旗に用いる絹織物を社殿に献上して戦勝祈願を行い、その勝利凱旋を吉例として境内に織物市が開設され、後の桐生織物繁栄の礎となりました。

御祭神

当宮は、菅原道真公をはじめ、公の御祖先である天穂日命を奉斎しております。

道真公は、承和十二年（八四五年）代々学者として朝廷にお仕えした菅原家にお生まれになりました。幼少より学才に秀で、御年わずか五歳にして和歌を詠まれ、十一歳にして漢詩を作られ、その才能は人々を驚かせました。さらに、幼少より学問に励まれ、十八歳で文章生となり、はやくも三十三歳で学者として最高の文章博士となり、優れた学識と誠直な政見によって、時の宇多天皇の御信任篤く次第に高位高官に昇り、五十五歳にして右大臣兼右近衛大将に任ぜられ、当代随一の学徳をもって政務を担当されましたが、藤原氏の讒言により太宰権帥に左遷され、延喜三年（九〇三年）五十七歳で至誠を貫いた生涯を閉じられました。

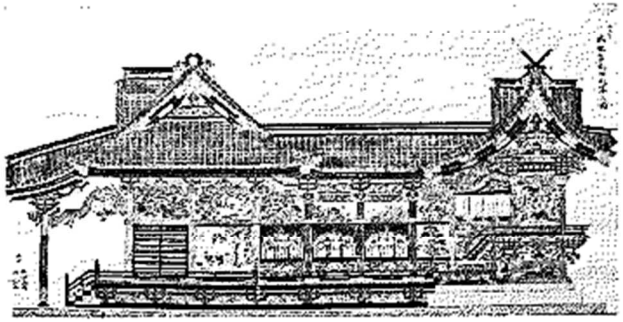
後世の人々はその御徳を敬慕して『管公』と称え、古くから学問の神として敬仰されました。

また、北野天満宮が道真公の御霊による祟りを御鎮めするために創祀されたことから、厄除け・災難よけの神として、さらに、道真公が京都から太宰府までの長い道程を無事に旅されたことから交通安全・旅行安全の神としても広く崇敬されております。

社殿（国指定重要文化財）

当宮の社殿は、近世の神社建築の典型とされる権現造の形式で、切妻流破風の本殿および幣殿には精巧で華麗な彫刻が施され、当初は画工の狩野益広が描いた『天満宮本社幣殿拝殿妻之図』のように極彩色に彩られていました。社殿造営は明和八年（一七七一年）に企図され、安永七年（一七七八年）に起工、寛政四年（一七九二年）に遷宮をなし寛政十一年（一七九九年）九月に落成したものです。造営は、町田主膳栄信を大棟梁とし、彫物棟梁は関口文次郎有信によるものですが、彫刻は本殿七面あり、上段には二十四孝の話・下段に唐子遊びの図、他にも細部に至るまで贅を尽くした彫物が社殿と見事に調和しています。

そして、古来『岩の上の天神』と称されるように、本殿・幣殿は岩の上に建ち、当時の建築装飾技術の粋を集めた建造物として、国指定の重要文化財となっております。



社殿

御開帳

天満宮の御開帳（臨時大祭）は、記録によると宝暦十二年（一七六二年）より昭和三十六年（一九六一年）までの二百年間に十三回斉行されましたが、なかでも御開帳の呼び物は『生き人形』の飾り物でこれは織物の街に特有の『座繰屋』が機械組みをするものでした。座繰とは織物準備機の一つで、木製の歯車を組合せた機械を応用して人形に動作をつけるもので、その原動力として、当時の堀を流れる水を用いた水車が使われ、後にはこれが電気仕掛けにかわりました。

出し物には、歌舞伎や伝記物語の名場面が多く各町会とも競って趣向を凝らし、全町会では十六場面もあったことから『飾物案内図』が出回り飾物小屋をはじめ稚児行列・芸妓行列やサーカス・大道芸など様々な催しが長期に渡って繰り広げられ、桐生の街をあげての一大祭典として賑わいました。

末社春日社本殿

紗綾市の図

紗綾市之図

江戸時代初期になると、天満宮境内では織物市が盛んに開かれ、近隣近在から集散する商品や人の交流の中心地として賑わいました。その後江戸時代中期には京都から高度な織物技術が導入され、紗綾・紋織などの高級織物が作られ、それらを取り扱う紗綾市（さやいち）が開かれました。

当宮の拝殿にある『紗綾市之図』は、競り衆によって絹織物がさばかれる様子を描いた大絵馬で、明治二十七年の天満宮臨時大祭（御開帳）の折りに奉納されたもので、近世の商工業・流通経済を知るうえで大変貴重な史料として、数多くの文献・教材等に取り上げられています。

末社春日社本殿（国指定重要文化財）

天満宮本殿の裏側に鎮座する末社の春日神社社殿は、一間社流造の建築様式で、規模は小さいものですが、先日の文化庁建造物課調査官による詳しい調査でも、慶長（一六〇〇年）以前の桃山時代頃の建立であると判明しました。このことは、現存する桐生の建造物の中では最古のものであるということです。

桃山時代は戦国乱世の頃で、その時代の建造物の遺存例はきわめて少なく、この『末社春日社』は、中世からの伝統を引き継ぐ地域色の豊かな独自の建造物であり、桐生を代表する大切な文化遺産として、国指定の重要文化財となっております。